

人口減少。それは大きな社会問題のひとつで、青森県も例外ではありません。令和2年までの5年間の「転出超過」が全国最多となる3万696人を記録し、特に若者の人口流出が止まらない青森県ですが、県外から移住を果たし、県内で精力的に活動をしている若者たちがいます。今回はその方たちから、自分らしく生きやすい地域のヒントを探ります。

八戸圏域に戻ってこい！ 女性3人組の情報発信ユニット「海猫ふれんず」



編集スタッフの小田桐咲(左)と平沼日菜子さん(右)
撮影はなづめさん。3人そろって海猫ふれんず。

「海猫ふれんず」の発足

クローバーあおもり編集スタッフの小田桐が所属する「海猫ふれんず」は、八戸圏域の魅力を伝える情報発信活動をしている女性3人組ユニットです。特にSNSでの情報発信を中心としており、令和2年10月から現在まで、約40件の動画を投稿しています。

海猫ふれんずのメンバーは全員同級生で、一度地元を離れ戻ってきたUターン移住者。Uターンした理由はメンバーそれぞれですが、一度離れたからこそ地域の魅力を知ることができたという思いは同じでした。

「地元で何か面白いことをしたい」との共通した思いから、当初は魅力発信を目的として活動していましたが、活動していく中で、その魅力を創り、守ってきた人がいることに気がつきました。

魅力紹介からワークショップ開催へ

今ある「青森県の魅力」は誰かが創り、受け継いできたもの。これからも、誰かが受け継いでいく。一体誰が？ そんな問いが生まれた時、地元を離れた若者たちに戻ってきてほしいという思いが生まれました。そこから、私たちは活動の目的を「青森県への移住促進」にすることに決めました。

その後、八戸市の「元氣な八戸づくり」市民奨励金制度を活用し、ふるさと納税をテーマとした高校生対象のワークショップを実施しました。人生最初のキャリア選択の場に立つ高校生にこそ、将来的な地元との関わり方を考えるきっかけを持つてほしいからです。

活動開始から約2年。ようやく「海猫ふれんず」としての原形を形作ることができてきたと思います。少しずつ認知度も高まり、配信を見てくれる人や協力してくれる人も増えました。

そんな「海猫ふれんず」が、本企画にて、同じように地域に根ざして活躍している若者たちに会いに行っていました！

青森県の人口について

人口の増減には2種類の要因があります。死亡数と出生数の差による「自然増減」と、転出者数と転入者数の差による「社会増減」です。

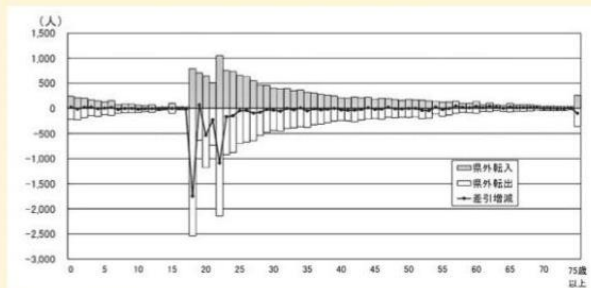
青森県では、後者の「社会減」が大きな課題になっており、令和4年3月の総務省の国勢調査に基づいた人口移動の統計では、令和2年までの5年間に青森県に入ってくる転入者数より青森県を出ていく転出者数が上回る「転出超過」が全国最多となる3万696人となりました。

人口が減ると、公共サービス・公共交通機関の確保や維持が難しくなる、地域コミュニティが機能しなくなる、地域文化や伝統文化の消滅など、様々な問題が発生してしまいます。

転出の理由としては、進学や就職など様々かもしれませんが、特に10代後半から20代の若者の転出が多くみられます。

最近では、コロナ禍で若い世代の地元就職や地方暮らしに関心が高まっており、県内定着への期待も膨らみます。

年齢別県外転出入の状況(令和3年)



出所：青森県統計分析課

佐井村の魅力

大畑さんが佐井村に移住して約3年半。佐井村の魅力は、村民一人ひとりが村への熱い思いがあり、それを行動に移すエネルギーがそこにあるところだそう。地方新聞社で働いているときから、面白いことを生み出していきそうなのだと感じていたそうです。平成28年にNPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟した佐井村は、平成30年には「日本で最も小さくかわいい漁村」というビジョンを掲げました。28のアクションプランのひとつが、大畑さんが担当しているクラフトビール作りへの活動なのだといいます。佐井村で育てたホップを使った委託醸造で、クラフトビール商品が誕生しました。

ビールの原料となるホップは、令和元年に休耕地を利用して栽培が開始されました。育てているのは村の有志たち。多い時には40人も人が集まって、ホップを育てているそうです。目的はクラフトビール作りを通して村に活気が生まれ、クラフトビールの流通によって村のことを知ってもらいたい。そして村のビジョンに近づいていくことが真の目的なのです。

今後の展望

今後新しいことや面白いことに挑戦したいと考えてくれた大畑さん。一方で、ワークライフバランスのライフも大切にしていきたいと話します。

更に佐井村には、ライフを大切にできる「豊かさ」があると大畑さんは言います。佐井村では、伝統芸能や集落ごとの行事な

漁師に恋して佐井村に移住！ 大畑彩美さんが語る佐井村の魅力とは

おお はた あや み

YouTube 海猫ふれんず 検索

大畑さんのクラフトビール販売会の様子を「海猫ふれんず」のYouTubeチャンネルでご覧いただけます。こちらからどうぞ➡



自慢のクラフトビールを手にお客さまにPRする大畑さん。

ども脈々と受け継がれています。伝統芸能や地域行事は、その運営を担うことで負担が増えますし、「やらないこと」を選択することもできます。ですが、それを続けている佐井村の人たちには、時間の豊かさがあり、心の豊かさがあり、そうして繋がった人間関係もやはり豊かなものになるのでしょう。

古くからある地域資源を大切に、そこから新たに面白いことに挑戦していくこと。佐井村でそれができる。大畑さんと佐井村のみなさんの「日本で最も小さくかわいい漁村」への挑戦はまだ続きます！

情報発信ユニット
海猫ふれんず
がいく！

なが お やす たか

エンジニアからりんご農家に！長尾泰孝さんの挑戦



ご自身のリンゴ畑を背景に。

IT業界からりんご農家に転身

長尾泰孝さんは青森市出身で、大学進学を機に上京。コンピュータが好きで、プログラミングが趣味だったことから、卒業後は都内のIT企業に就職しました。しかし、現在は、青森市浪岡に移住し、りんご農家に転身！令和4年の4月に独立し、約3ヘクタールの農地を営営しています。

そうだ農家になろう！

会社勤めしているうちに、自分で事業をやってみようという気持ちが生まれてきたという長尾さん。もともと植物が好きだったこともあり、農業に目をつけていたそうです。地元の特産品ということもあり、りんごについて調べていると、その栽培技術に心惹かれました。

長尾さんはもともと新しく変化していくものに興味があり、コンピュータやブ

ログラミングの世界に惹かれたのも、その変化の速さに惹かれたからだそうです。青森県のりんごの栽培技術は全国的にも進化を遂げており、まさに今、りんご産業は変革の時期を迎えているのだそう。それを知った長尾さんは、農家に転向する不安よりも、りんご産業に挑戦してみたいという意欲が勝り、りんご農家になることを決意しました。

ゆかりのなかった浪岡へ

農家になることを決意し、あおもり農業支援センターなどの相談機関を回り、その中で、地域県民局から現在の師匠であるりんご農家さんを紹介してもらいました。

青森市浪岡は、佐井村の漁師縁組制度のように、農家になりたい若者を研修生として受け入れ、トレーナー農家のものと修行し独立までを支援する制度が整っているそうです。

トレーナー農家のもて修行ができるこの制度は、長尾さんのような若者にとつては、助けとなる便利な制度なのです。長尾さんの他にも何名かこの制度を利用して挑戦している若者がおり、今年も女性が1名、独立を果たしたそうです。「なんでも相談ができる」そこがこの地域で農業をする魅力だと長尾さんは言います。

ITとりんごの共通点

ITとりんご、一見正反対のようですが、実際には共通点もあるのだそう。それは「やった通りにしかない」とい

うこと。コンピュータも植物も、与えられた条件で動くものだといえます。その条件、すなわち環境を、いかにして整えるかが自分の仕事だと長尾さんは話します。ITとりんごでは、時間のスパンが大きく異なりますが、その変化は着実に起こっています。自分がしたことがそのまま返ってくるその変化を楽しむことができるのは、ITもりんごも同じです。

今後の展望

農業の面白さにとことんハマっている長尾さん。将来的に、農業を生業としていける人を増やす手助けができるよう、ご自身のりんご園でも、繁忙期だけではなく、ネットを利用した通販サイトの立ち上げなどにより、通年雇用に積極的に取り組んでいきたいと語ります。そして、りんご園で働いていく人がストレスなく働ける環境を整えることが今後の展望だそうです。



りんごの実を間引く、「実すぐり(摘果)」作業の様子。

▼取材を通して…

今回、佐井村と青森市浪岡で活躍するおふたりを取材してきました。大畑さん、長尾さんのおふたりが自分らしく人生を選択している様子が印象的でした。

人口流出は若者、特に若年女性の流出が多い傾向にあります。青森県では自分らしく生きられないと思われるからなのではないでしょうか。

「女性らしく」「男性らしく」「こうでなければならぬ」等、固定されたイメージではなく、自分らしく選択できる、地域の寛容さがポイントなのかもしれません。

個に焦点を当てた生き方が主流になつていく現代。おふたりのように、不安や心配を乗り越え、自分らしく挑戦している若者たちが、青森県にも実はたくさんいるのかもしれない。

これからも「海猫ふれんず」の活動を通して、地域で活躍している人たちに会いにいき、発信していきたいです。

そして、青森県は若者にとつても魅力的な地域なのだと知ってもらえたら嬉しいのです。

(取材・小田桐 咲)